

國學院大學學術情報リポジトリ

〔談話室〕 愛と悲しみ：
ベル・フックスが教えてくれたこと

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小手川, 正二郎, Kotegawa, Shojiro メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000729

愛と悲しみ——ベル・フックスが教えてくれたこと

小手川正二郎

年末年始にかけて、二つの辛い別れを経験した。一つは、ベル・フックスの計報だ。彼女の『フェミニズムはみんなのもの』（堀田碧訳、エトセトラフックス）を教えてもらったのは、元同僚の佐藤静さんからだ。それまでフェミニズムと聞くと「平等を掲げて男性を糾弾する運動」といった歪んだイメージしかもてていなかった私が、フェミニズムを真剣に学び始めたのは「フェミニズムについてもっとよく知れば、男性たちはフェミニズムを恐れなく思う」というフックスの言葉に勇気づけられたからだ。

フックスは、家父長制や資本主義のあり方に一貫して批判的であり続けたが、それでいて彼女の言葉は特定の人を貶めることはなく、つねに読者を励まし、勇気づけ、奮い立たせるものだった。私自身もそんな彼女の文章にいつも励まされてきた。男らしさととられた男性たちをフェミニズムの視点から考えられるか確信をもてないでいたときに背中を押してくれたのもフックスの『変わるうとする意志・男らしさ・愛』（*The Will to Change: Men, Masculinity, and Love*, Washington Square Press）だった。『オール・アバウト・ラブ』（宮本敬子・大塚由美子訳、春風社）は、愛に対して真摯に向き合う必要性を教えてくれた。

K・W・ホワイトヘッドが美しい追悼記事で述べているように、30冊以上の著作一邦訳されているのはそのごく一部——と共に「ベル・フックス」（母方の曾祖母からとられたペンネーム）は生き続けるが、グロリア・ジーン・ワトキンスという本名をもつ女性はもういない。「彼女がまだ私たちと共にいた頃の日差しは今はないのだ」（*Karsonya Wise Whitehead, bell hooks will never leave us, The Conversation, December 17, 2021*）。

もう一つは、愛犬プッチーとの別れだ。五年前に義母が急逝し、義母と暮らしていたプッチーをわが家に迎えて以来、いつも一緒だった。半年前から老衰に伴う肝不全で食欲がなくなり、妻が毎朝点滴をしたり、流動食をあげたりして何

とかもちこたえてきたが、元日早朝、十四歳の誕生日を目前に亡くなった。

「ベットロス」と呼ばれる悲しみの深さを初めて知った。家中のいたる所や物（日向ぼっこをしていた場所、穴掘りをしていたマット）がありし日の姿を思い起こさせ、お散歩コースやスパーのベット用品売り場を通りかかる度に、涙をこらえきれなくなる。フェミニズムのおかげで「人前で泣くのは男らしくない」とする男性観を批判的に見つめ直すようになった一方で、私自身はなお悲痛を表に出さないようにすることが多かった。今回もなぜそうできないのか戸惑いながら、悲しみに振り回され、何も手につかない日々が続いた。

そんななか、前期授業で取り上げたフックスの計報を学生に伝えようと、彼女の『オール・アバウト・ラブ』を再び開いたとき、次の一節が目にとまった。

愛は恥を知らない。愛することは、悲しみに対して心を開くことであり、たとえ終わりのない悲しみであっても、それに影響されることである。私たちが悲しむ方法は愛を知っているかどうかによって特徴づけられる。愛はあまりにも多くの恐れを解き放つので、愛はまた、私たちの悲しみをも導いてくれる。愛する人を失うとき、私たちは恥じることなく悲しむことができる。そのように献身することは、愛の重要な要素であるから、愛する私たちは、生と死において絆を維持しなければならぬと知っている。(227-228頁)

私たちはときに、悲しいことが起こっても涙を見せることが恥ずかしいと思つて、涙をこらえたり、感情を抑えこんだりしてしまふ。しかし、誰かを愛することは、周囲にどう見られるかといった不安や恐れから人を解き放ち、もうこの世にいないとわかついても相手とのつながりを保持し、相手への真摯な感情を表すことを促す。だからこそ、「愛する人を失うとき、私たちは恥じることなく悲しむことができる」。

これを書いている今もお悲しみは癒されることなく、残り続けている。しかし、フックスの文章を読んで、ふとした時に悲しみに襲われ、涙がこぼれてしまうのは、私がブッチーをかけがえのない家族の一人として愛していたこと、今もお愛し続けていることの表れなのだと思うようになった。フックスの言葉にまたも救われたのだ。彼女への感謝の気持ちを直接伝えられないことだけがただただ残念である。

(西洋近現代哲学・現象学)